

ti Kebangsaan Malaysia) が、ポスター賞に Anang Sedyotomo 氏 (岐阜大)、火口博道氏 (徳島大)、廣田和敏氏 (熊本大)、Hyun-Jin Jung 氏 (Korea Institute of Science and Technology) の4名が選出された。

夕刻に開かれた Asianalysis X の Welcome reception に AYACS 参加者も集い、この時間帯の一部をお借りして、ベストポスター賞とポスター賞の授賞式を行った (写真2)。

ポスター発表内容は多岐にわたり、招待講演でも今回は特にテーマを設けなかったが、小生は常々、20歳~40歳代の学生・産学官研究者が一堂に会し、刺激を受け合うことこそ、とても意義が深いと思っている。また、良き国際的友好関係の上に良き国際共同研究が成り立つことを信じている。写真3は、無事に AYACS を終えた実行委員同志の安堵の姿である。たくさんの方々のご協力を受けたことに対する感謝と、若い国内外の研究者に刺激の場を提供できた自負を胸に会場を後にした。

[愛知工業大学 手嶋紀雄]

◆

ガスクロマトグラフィー研究懇談会 300 回記念 特別講演会 (第 302 回ガスクロマトグラフィー研究会)

2009年12月11日、江戸東京博物館ホールにて「安心・安全と快適な生活を支える分析化学」の題名で、標記特別講演会が開催されました。あいにくの冷たい雨にもかかわらず、予想を上回る200名に及ぶ参加者を得て、大盛況のうちに終了しました。

最初に開会の挨拶が前田恒昭委員長(佃産業技術総合研究所)より行われました。これまでのガスクロマトグラフとGC研究懇談会の変遷や、海外交流も踏まえた、明るい未来に向けた展望のお話がありました。

主題講演1の1題目は「ビール中の香り成分分析~ビール中で効いている香り成分~」で、鰐川 彰氏(アサヒビール株)より講演がありました。ビールの香り成分はすべて解明されておらず、ホップの香り成分(マスカット様の香り)だけでも産地差があり、鮮度低下(酸化臭)による変化もあるそうです。また、必ずしも成分と匂いは1対1に対応しておらず、各成分が総合的に影響しているため、香り成分の解明は慎重に行う必要があるとのことでした。分析手法は固相マイクロ抽出(SPME)やスターパー抽出によるGC/MS分析のほか、匂い嗅ぎGCが主流との内容でした。

主題講演1の2題目は「気になる体臭とニオイ抑制技術」で、田中孝祐氏(ライオン株)より講演があり、制汗剤開発の経緯を説明されました。性別により不快と感じる成分や強度が違い、加齢臭以外にも年代によって臭いの違いがあるそうです。その臭い成分を特定し、抑制する植物エキスを選定し、その後商品化が行われているとの話でした。また、官能試験と、匂い嗅ぎGCは必須と話されていました。

主題講演1の3題目は「食品用容器包装の有害化学物質分析について」で、金子令子氏(東京都健康安全研究センター)より講演がありました。食品衛生法による器具や容器の検査規

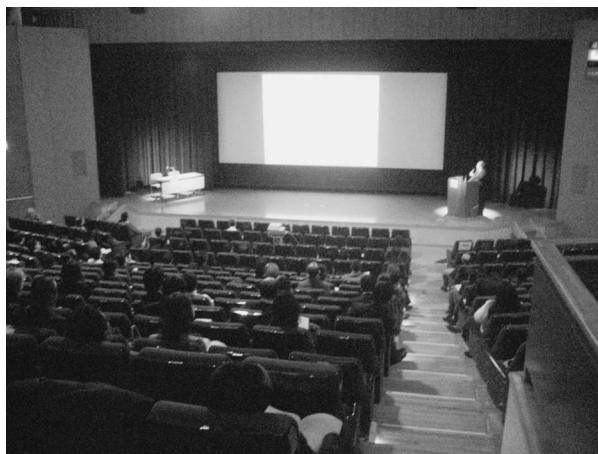


写真1 講演会場風景



写真2 展示会場風景

格のお話で、市場に流通している、皿、コップ、レンゲ、鍋、容器、フィルム、ボトルなど食品に直接接触するすべての物が対象で、規制成分の分析紹介でした。

午後からは、主題講演2として「ヘプタクロール・ディルドリン等のリスク管理」で、清家伸康氏(佃農業環境技術研究所)より講演がありました。有機塩素系農薬(OCPs)、残留性有機汚染物質(POPs)や国際条約で指定されている成分の話がされました。ヘプタクロール・ディルドリンは既に使用禁止になっているが、土壌に残留していて、ウリ科作物のみに吸収濃縮され、基準を超えてしまう場合があるとのことでした。

主題講演2の2題目は「環境化学と分析化学—有機塩素系環境汚染物質を中心として—」で、宮田秀明氏(摂南大学・大阪工業大学)より講演がありました。有機塩素系環境汚染物質として、ダイオキシン、ポリ塩化ビフェニル(PCB)などの有害性、廃棄状況(管理不十分)の紹介がされました。また、異性体分離のカラムの話や有効な方法として、包括的二次元ガスクロマトグラフ(GC×GC)の話もされました。

主題講演2の3題目は「科学捜査とテロ対策」で、瀬戸康雄氏(科学警察研究所)より講演がありました。科警研の紹介と、和歌山毒カレー事件、新潟アジ化ナトリウム事件、松本・地下鉄サリン事件等からの教訓を基にした現状の毒物分析体制についてお話がありました。また、毒物や合成麻薬の不純物分析を行い、出所を明らかにするお話もありました。

その後は、招待講演で「化学物質の安全性管理の取り組み」と題して、北野 大氏（明治大学）より講演がありました。化学物質による有害な影響として、ジクロロジフェニルトリクロロエタン（DDT）、PCB、フロン（CFCs）の事例を紹介されました。また、化学物質の有害性は暴露と影響の関数であり、暴露と影響の両面からの規制を行う方向に向かっているとのことで、化学物質審査規制法の成立と改正へも言及されました。

招待講演の2題目は「分離科学のさらなる発展」で、中村洋氏（日本分析化学会会長、東京理科大学）より講演がありました。日本におけるLC、GCの発展に貢献された諸先生の紹介や、LC研究懇談会やGC研究懇談会の歴史の概要説明のお話がありました。今後も、人材育成が重要であることのお話がありました。

最後に、閉会の挨拶として、招待講演の3題目は「懇談会の明るい未来」で、保母敏行氏（東京都立大学名誉教授）より講演がありました。今後のガスクロマトグラフの発展する手法や、GC研究懇談会の在り方など、今後のあるべき姿の方向性を示していただきました。

講演会の終了後、意見交換会が開催されました。大勢の参加者があり、楽しいイベントも行われたため大いに盛り上がりました。参加者の親睦も図られ、楽しい時間を過ごせました。

〔榎島津製作所 吉岡節男〕



第14回高分子分析討論会

2009年11月4、5日の2日間、高分子分析研究懇談会主催の高分子分析討論会が、工学院大学で開催された。本年は、発表件数が過去最高の100件、参加者が306名となり、高分子分析に対する関心の高さが示された。

討論会は、西本右子実行委員長（神奈川大学）の挨拶で開会后、ポスタープレビュー講演が行われた。前年までは、プレビュー講演時間が3分間であったが、発表件数の増加に伴い、2分30秒に短縮された。発表内容は、構造解析、表面分析、反応解析など多様なものであった。4回行われたポスター発表での議論は、非常に活発に行われ、1時間30分の発表時間が短く感じることもあった。

特別講演としては、初日に「バイオベースマテリアルの新展開：バイオマス度と生分解性識別法の観点から」と題して、京都工芸繊維大学大学院（生体分子工学部門）の木村良晴教授がお話しされた。バイオベースポリマーの構造からその評価法まで多岐にわたるお話で、環境対応が求められる今後の研究開発において、有用な知見がいただけた。二日目は、「構造制御された高分子薄膜の相転移」と題して、首都大学東京大学院（都市環境科学研究科）の吉田博久教授がお話しされた。斜入射X線回折やDSC-RTIRなど用いたナノスケールの構造解析や相転移の解明のお話は、高機能化が求められる高分子材料開発にとって、非常に重要だと感じた。

1日目の夜に開催された懇親会では、日本分析化学会の中村洋会長をはじめ、多くの方々に参加された。中村洋会長の挨拶により懇親会が始まり、会場が狭いと感ずるほど盛況に行われた。

2日目の最後に、大谷 肇運営委員長（名工大）より、閉会の挨拶が行われ、第15回高分子分析討論会は、高分子分析研究懇談会50周年記念事業の一環で、国際学会として開催するとのアナウンスがあった。第15回高分子分析討論会（国際学会）は、2010年12月8日（水）～10日（金）に名古屋国際会議場で開催される。

ポスター賞は、歴代運営委員長・実行委員長の選考による「審査員賞」が2件、ポスター発表者の投票による「ポスター賞」が4件あり、懇親会および閉会の挨拶の時に、大谷 肇運営委員長より授与された。下記に受賞したポスター賞を紹介する。

審査員賞

「硫酸液抽出を前処理とするポリマー中のHALSの選択的・包括的分析法の開発」 佃 由美子（三菱化学アナリティック）
「種々の誘導化試薬を利用した劣化した漆膜への高感度分析法の検討」 本多貴之（明治大理工）

ポスター賞

「熱走査FT-NIRを用いたエポキシ樹脂硬化反応の挙動追跡」 山崎秀樹（日東分析センター）
「蒸発光散乱検出器（ELSD）を利用したヒンダードアミン系光安定剤（HALS）の定量化の検討」 森下雅史（日東分析センター）
「ピンポイント濃縮法による微量高分子材料の組成分析」 森脇博文（東レリサーチセンター）
「水熱プロセスを利用した架橋高分子材料のネットワーク構造